慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィリアム・ゴドウィン研究文献（三）
Sub Title	William Godwin bibliography (3)
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.6 (1960. 6) ,p.535(37)- 542(44)
JaLC DOI	10.14991/001.19600601-0037
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600601-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

～396. 更と同書 p. 221 Notes on the Collations. by W. A. G. Doyle-Davidson とは当時の版本として、John Rastell 版、Wynkyn de Worde 版 William Rastell (1557) 版の紹介がある。

(11) Ibid., p. 18, Introduction, by A. W. Reed. による。

(12) Ibid., p. 363. 甥 John Francis への書簡、イタリアの貴族 Andrew Corneus 宛一通。前二者は甥の悩みへの助言であり、後者は学問を役立てて仕官することを勧められたのに答えたもので、御用学問となる危険を説いている。モアの「ユトーピア」第一部の仕官反対の説が想起される。Ibid., pp. 374～380.

(13) ヴァルガタ聖書の詩篇第十五篇。

(14) Ibid., pp. 381～396.

(15) Ibid., pp. 347～8. 及び The Correspondence of T. More, op. cit., pp. 9～10. epist. 4.

(16) Eng. Works of T. More. Vol. I. op. cit., p. 18, Introduction, by A. W. Reed. による。

(17) Ibid., p. 363.

(18) Oratio, de Dignitate hominis; Pico della Mirandola (1486)「人間の尊厳について」(植田敏郎訳) pp. 7～8.

(19) Eng. Works of T. More Vol. 1. op. cit., p. 18, Introduction, by A. W. Reed. による。

(20) Citizen Thomas More and his Utopia; Russel Ames (1949) は、ロンドン市民層とトマス・モアという問題点を積極的に示している。

(21) Eng. Works of T. More Vol. I. op. cit., pp. 398～455.

(22) Ibid., p. 42, The Textual Problems of the "History of Richard III" by W. A. G. Doyle-Davidson 及び p. 24, The Authorship of the "History of Richard III" by R. W. Chambers 参照。

(23) Ibid., Textual Problems of the "History of Richard III" by W. A. G. Doyle-Davidson. 及び 'Richard III., (The Works of Shakespeare) ed. by John Dover Wilson (1954), Introduction による。

(24) Ibid., J. D. Wilson は Introduction で両者の比較を試み、モアの市民層への強調を指摘している。R. Ames の見解と同様な方向にあるとみられる。

(25) The Works of Shakespeare, Globe edition (1953) p. 603. The Tragedy of King Richard III, Act II. Scene III. (坪内逍遙訳、リチャード三世 p. 117)

(26) 英米法における「法の支配」伊藤正己著 A Concise History of the Common Law, T. F. T. Plucknett. (イギリス法制史・総説篇上 伊藤正己監修訳)
トーマス・モア 沢田昭夫著 (1959) には、法の人「トマス・モア」が丹念に跡づけられている。 (一九六〇・四・六)

資料

ウィリアム・ゴドウィン研究文献 (三)

白井厚

前二回において、F・E・L・プリーストリとD・フレイシャーのゴドウィン研究を紹介したが、そこで問題となることは、極めて複雑なゴドウィンの思想を、どのような視角から、いかなるものとして、理解するかということである。

プリーストリは、ゴドウィンの思想の最初の前提を形而上学と心理学に求め、そこから道徳哲学→政治哲学→経済思想という展開を通じて、それがフランス唯物論者の機械論的、快楽主義的道徳相対主義、功利主義よりは、真理の独立性と価値の絶対性を説くプラトン的合理主義を真の基礎としていることを示そうとした。そこでドルバック、エルヴェシウス、ハートリ、ベッカリアに対して、プライス、カドワース、クラーク、エドワーズ、フォーセット、シャフツベリー、ハチスン、ヒューム、ミルトンなどの影響が重要視され、ゴドウィンが功利主義と対立していることが強調される。プリーストリには "Platonism in Political Justice," (*Modern Language Quarterly*, 4, 1943) という論文もあって、ゴドウィンにおけるプラトン主義の指摘は、彼の中心課題といえよう。

ゴドウィンの思想は、エルヴェシウス＝ベンサム系の利己的な快楽説とは明らかに異なっているので、その相違を考えることは重要であるし、相対的な功利主義と絶対的な合理主義、フランス系の唯物論とイギリスの非国教神学系の伝統という思想の二重構造を通じて、後者の優位を説く見方はまことに興味深い。実際彼の体系は、ベンサムにおけるような単純な快楽算術に終るのではなく、individuality, sincerity などの価値を含んでいて、快楽はむしろこれらの追求における副産物となっているところにその特異性があるのである。

しかしながら、ゴドウィンもまた自然法から功利主義へという十八世紀の共通の思想の進展の中で、特に親しくドルバックやエルヴェシウスの功利主義を学び、これをイギリスに導入する上に大きな役割を果しているのだから、彼の思想を功利主義に対立するものと云い切ることには異論があろう。D・H・モンロウは、これは或る

程度言葉の問題だとして、次のように云っている。「もし功利主義は利己主義と相対主義を含むものと定義すれば、ゴドウィンもシジウィックも除外せねばならず、ミルすらも功利主義者であるかどうか疑わしい。だが思うにゴドウィンはシャフツベリイやハチスンよりも進んでいたので、最大多数の最大幸福をもたらすようなもの以外にはわれわれは権利を持っていないという理由で、所有権を含む自然権に反対し、約束は道徳の基本ではなく本質的にそれに対立するものという理由で社会契約説に反対した。……彼は彼の道徳理論を二つの文章で要約した。『徳の目的は快楽感の総計を増すことである。徳の標識となり、規制をするのは、多数の人に快楽をもたらすことを一人の快楽のためには行わないという公平さである。』この公平の原理は彼の道徳感を最もよく表わしており、これはまたベンサムの『誰をも一人として数え、一人以上には数えない』という言葉と本質的に異ならない。シジウィックと同じように、実にゴドウィンはこれを利己主義からは演繹できない窮極の道徳原理とみなしたのである。彼は功利主義の歴史を研究する人々によって無視されてきたが、混乱し生半可などころか、際立って慧眼の功利主義者であった。」(D. H. Monro; Godwin's Moral Philosophy, p. 15)

ゴドウィンの公平の原理がベンサムの一人一票主義と本質的に変らないという説には異論が立てられよう。例のフェヌロンのたとえにも明らかなように、ゴドウィンは〝普遍的仁愛〟を説くことにおいて公平であるが、快楽に質的差を認め、個人の価値による差別を

主張して、ベンサムの一人一票主義よりはJ・S・ミルの複数投票制に近い。そこから功利主義としては特殊な彼の理論が生まれてくるのである。

しかしながら、功利主義が純粋に感覚的に説かれたことはむしろ少ないので、モンロウのいうように、利己主義と相対主義に限るとその範囲はあまりに狭くなり、周辺の思想との有機的な関係が見落されてしまう。そこで、ブルジョア的人間観の形成(功利主義)という大きな流れの中で、いろいろな説の複合性を比較することが当時の複雑な社会の発展と思想の交錯を知る上に興味深いし、エルヴェシウスからゴドウィンが何を学んだか、何故感覚論＝国家統制から理性＝無政府主義へと屈折したか、を究めることが、単なる区別以上に、彼の思想を知る上に重要と思われる。フランス唯物論はもちろん彼に功利主義とさかんな批判精神を与えたであろうし、これを受容した非国教神学系の伝統の中にも、プラトン主義のみならず個人的判断の重要性や平等を主張してすでに近代的人間観が成育し、その意味で功利主義を受け入れる素地があったはずである。ただしこれに対する態度は、非国教派の置かれた社会的位置によって、フランス唯物論とは大いに違うといわねばならない。ゴドウィンの思想を理解するためには、相対主義と絶対主義という論理の二重構造だけではなく、イギリスとフランスの資本主義の発展段階の差、そこから出てくる思想の社会的な性格を規定することが先ず必要である。そこで初めて彼の思想的な貢献を評価することが出来ようし、同時に経済思想などの限界も明らかとなろう。

*

D・フレイシャーの書は、ゴドウィンを含むイギリスの改革運動は長い眼で見ると全世界にわたって社会を革新したと考え、ゴドウィンの思想は理性を誇張した誤りを含むとはいえ、ヒューマニティへの奉仕、政府の支配に対する自由の主張など現代にとっても極めて重要であると説く。彼はゴドウィンを、本有観念の否定、連想心理学、必然論、功利主義などを基礎とした perfectibility theorists の一人として、改革運動における時代精神との結び付きを重視しているので、プリーストリの視角とは幾分異なっている。

この書は「自由主義の一研究」という興味ある副題を持っているけれども、その分析はあまり十分ではない。彼はゴドウィンの後期の思想に関連して次のように云っている。

「われわれが考えねばならないもう一つの変化は、*Thoughts on Man* の〝人間行為の自由について〟という章で述べられており、これは必然論を容れることが実際の意志や行為に影響する範囲を扱っている。ここで問題となるのは必然説が正しいかということではない。それが正しいということについての彼の意見は変っていない。……だが彼はここで『政治的正義』の頃とは違ったことを信じるに至った。即ち必然の真理は、いかに理論的には純粋に考えられていても、実際においては決して採用されないということである。何故なら人間には基本的な根深い自由の感覚があって、自由のみせかけは誤りであると理性では納得している時ですら、このみせかけによって行為することを自由の感覚が常に強要するからである。……」

ここで問題となるのは、ゴドウィンの必然論が自由の概念とどのような関係にあるのか、また彼の自由主義が自由主義思想の歴史の中でどのような位置を占めるのかという二つのことであろうが、二つとも未解決のままに放置されている。デモクリトス、ホッブズ、スピノザ、ラプラス、ディドロ、エルヴェシウス、ドルバック等の唯物論における必然論は、一切の運動を形而上学的に理解し、因果関係と法則的必然を混同する点において誤りであるにせよ、世界の科学的解釈を発展させる上に大きな役割を果した。ゴドウィンの場合、物質界の必然法則から精神の因果法則を推論しようとして功利主義へと進むのであるが、そこでは弁証法と経済学を欠き、当然に議論は混乱してくる。しかしこの混乱は功利主義全般に存在するので、ゴドウィンにおけるその分析は彼の思想を理解する上に重要なものである。そして自由主義に関していえば、全ての無政府主義がそうであるように彼の自由観は窮極まで進んでおり、彼が最初の近代的無政府主義者であるということは、それだけ彼における近代的個人の徹底化を示していよう。彼のこのような自由主義の位置を定めるためには、まず改革運動全体の思想系列、そしてそこにおける彼の特異な立場を見なければならない。

*

このような点で、やや文学的だがこの時代の思想背景を知るのに便利なものに **A. E. Rodway; Godwin and the Age of Transition, Lond., 1952.** がある。これは Life, Literature, and Thought Library の一冊で、思想を時代精神の表明として示すことを目的に編集され、ロドウェイの序文の他に当時の社会情勢や諸思想、ゴドウィン批判などの文章を広く雑誌などからも集めていて、次のような内容をもつ。

I　生活と思想

生活水準（農村の貧困……*William Cooper* 質素な食卓……*William Cooper* 乏しい夕食と平常の朝食……*William Combe*）

腐敗（選挙……*The Times* 政府の腐敗……*Thomas Chatterton* 未来……*Thomas Chatterton*）

課税（英国人の課税……*Anonymous*）

変化と革命（中産階級の興隆……*William Combe* 服従心の衰退……*James Boswell, Edmund Burke* フランス革命……*William Wordsworth*）

支配の方式（政府の機能……*Edmund Burke, Thomas Paine* 政治改革……*Sydney Smith*）

道徳の諸原理（仁愛と効用……*David Hume* 一般的仁愛……*Joseph Priestley* 理性と感覚……*Joseph Priestley* 自然……*William Wordsworth* 効用……*William Hazlitt*）

社会の原理（自由の性質……*Richard Price* 自然と社会……*Jeremy Bentham, Thomas Paine* 社会と文明……*Thomas Paine* 人口……*T.R. Malthus*）

II　「政治的正義」より　*William Godwin*

III　文　学

ゴドウィンの小説（牢獄のケイレブ・ウィリアムズ……*Caleb Williams* より　ケイレブ盗賊の手に落ちる……*Caleb Williams* より　自然に帰れ……*St Leon* より　苦悩の盃……*St Leon* より　絹工場にて……*Fleetwood* より　島の人……*Fleetwood* より）

ゴドウィンの弟子の作品（戦争と税……*Robert Southey* わがものと人のもの……*Robert Southey* ウィリアム・ゴドウィンに捧げるソネット……*Samuel Taylor Coleridge* 悪しき社会……*Samuel Taylor Coleridge* 真実と恐怖……*William Wordsworth* ゴドウィンの一千年王国……*Percy Bysshe Shelley* 気高き望み……*Percy Bysshe Shelley* 人間のみ……*Percy Bysshe Shelley* 力強き変革……*Percy Bysshe Shelley*）

ゴドウィン批判の作品（陰の対話……*The Anti-Jacobin Review* より「自由の幻影」より……*The Anti-Jacobin Review* より　むき出しの理性……*William Wordsworth* 唯一の法……*William Wordsworth* 完成能力……*Thomas Love Peacock*）

ロドウェイによると、ゴドウィンの思想の背景は次のようになる。

十八世紀の時代精神は、初めのオーガスタニズム（理性）から終りのロマンチシズム（感情）への動きとして描かれるのがふつうである。だがより正しくは、前者は理性の時代というよりは思慮、寛容、礼節を伴った調和の時代であって、この調和は一七五六年の政治の腐敗→ジョージ三世の個人政治→フランス革命とそれに続く抑圧、に至って破れる。宗教、美術、文学などにおいて、〝感情〟の要素は増すけれどもそれにつれて〝理性〟が衰えたわけではない。理性と感情の対立という表現は単純に過ぎる。

ゴドウィンの時代には、少なくとも三つの派――合理主義者、ロマン主義者、保守主義者があった。もちろんこの内部にもいくつかの派があり、また三つは簡単な対立状態にあったのではない。ロマン派のバイロンは古典派のポウプを崇拝してサウジーやワーズワースを攻撃し、急進主義者の起訴は保守党政府によってではなく、改革派によって行なわれる。更に、合理主義者の教義は自然権などの信仰によってロマン派の不条理と近く、他方ロマン主義者の反抗は形而上学的（ブレイク、ワーズワース）、政治的（シェリー、バイロン）、文学的（キーツ）を問わず知的な理論に基づいている。

だがこうしてみても、ゴドウィンをそのどこへ入れることも難しい。実際、彼は調和を欠き分裂した時代の複雑さを体現しているところにその独自の意味がある。政治の混乱、経済的変革、拡がる貧富の差、選挙制度の矛盾、教会の腐敗、犯罪の増大、対立の激化、及びそれに伴う物質的な進歩、人道主義の成長、などがゴドウィン達改革論者の理想主義に情熱を与え、科学の進歩、自由貿易主義、ルソー、非国教派の富の批判、ロックの本有観念否定、連想心理学、功利主義の発展などが影響する。「結局ゴドウィン的な理論はこの時代の財産であった。……『政治的正義』に力を与えたものは、冷静な理性と熱い信仰の結合である。いわばゴドウィンは、その合理的方法と用語とにおいて功利主義者であるが、宗教的熱情を唯物的な方向に向けた感動的な反抗者である限りロマン派の人である。」

（p. 25）

かくして、ロドウェイはゴドウィンを理性と感情の両面を備えた動きの頂点として把える。何故ならば、彼以後、理性と感情は分裂し、功利主義は感情を否定して官僚政治へ、ロマン主義は理性を棄てて狂信へと進んだと考えられるからである。だが彼を理性と感情の両面を持つというだけでは問題は解決しない。確かに彼は功利主義者の中ではロマン派との結合の頂点に立つし、そこに象徴されるように近代的個人の形成を押し進める面と、これに鋭い批判を浴せる面の二重の論理構造を持つのである。けれども、これを理性と感情として処理することはやはり単純に過ぎるといえよう。この二つは功利主義の内部においてすでに複雑な問題であり、それがゴドウ

ィンの中にもつれ込み、彼以後、ミルやシジウィックでも重要なのである。ブリーストリが述べたように、ゴドウィンの場合は理性的だとしても、功利主義は元来が感覚的な人間把握なのであろう。そこで功利主義とロマン派が真に対立する点は、理性と感情ではなくて、ブルジョア的人間観とそれへの反抗というところにおいてであった。その極端な例としてマンナムとカーライルを挙げることが出来るし、そこで分裂したものは経済学と社会批判なのである。（これについては拙稿「十八世紀英仏社会思想の発展とウィリアム・ゴドウィン」三田学会雑誌五〇巻八号参照）

*

ゴドウィンの時代の社会状勢、彼の交友関係などについては、**Rosalie Glynn Grylls; William Godwin and his World, 1953** が詳しい。これは

Prologue: The Treason Trials of 1794
The English Jacobins at Home and in France
Charles Lamb and his Circle
The Advent of Shelley and its Consequences
Full Circle: A Place under Government
Acknowledgements
Appendices

からなる。著者は Mary Shelley, Claire Clairmont, E.J. Trelawny の伝記作家で、Lord Abinger のシェリとゴドウィンに関する資料のコレクション、デューク大学図書館所蔵のゴドウィンの日記のマイクロフィルム、その他シェリ、革命後フランスにいたクエイカーの John Hodgkin や、フランスの自由主義的貴族 Jean-Baptiste Chastel de Boinville などの日記、家史など、C・K・ポール以来の伝記作家が使わなかった原資料にあたっているようであり、ゴドウィンや Thomas Holcroft, John Opie, Mary Wollstonecraft, Charles and Mary Lamb, Mrs. Clairmont, Cornelia Turner などの肖像画が珍らしい。ただこの書は一七九四年の叛逆裁判、イギリス・ジャコバン達の動き、ゴドウィンの交友などについて劇的な描写を見せてくれるけれども、その典拠を正確に示してはいないので、研究書というよりはむしろ伝記文学に近いものである。

*

研究書として新しい問題を提起しようとしたものに、**D. H. Monro; Godwin's Moral Philosophy, an interpretation of William Godwin, 1953.** がある。これは Oxford Books の一冊で次のような内容を持つ。

Introduction
1. Archbishop Fénelon versus my Mother
2. Reason and Feeling
3. Godwin and Montesquieu
4. The Insufficiency of Honour
5. The Depravity of Virtue
6. The Empire of Prejudice
7. Criticism

その主要な論点は、これまでの説明がゴドウィンの最も特徴的な思想の多くを無視したり歪めたりしていること、彼にとって人間状況の悲劇の中心は孤独にあるということ、彼は元来政治的な改革者ではなくて、人間をその仲間から切り離す偏見の分析について考慮したモラリストであること、であって、そこでは彼の小説類やモンテスキュー、ハートリ、ハチスンの影響なども検討される。ゴドウィン伝説というサブ・タイトルをもつ序文には次のように書かれている。

ゴドウィンの名が出ると、いかさま師、変り者というような不愉快な性格がいわれる。彼は愛情や忠節を冷血な〝普遍的仁愛〟に換え、国家や家族を含む全ての政治的社会的制度を全く幻想的な理性の支配に変えようとした冷い頑固者とみなされてきた。だがゴドウィンに最も特徴的な思想は、これまでの見解に反して次のようなものである。

1 彼は行為における感情の役割に盲目であったのではなく、それを排斥しようともしなかった。彼の全ての小説の主題は、仲間の共感から切り離された人間のみじめさである。われわれは多かれ少なかれ洞察（cinsight）の欠如によって切り離されていると彼は信じていた。

2 彼が賞讃する〝理性〟は抽象の操作ではなくて、スピノザの scientia intuitiva のようなものである。特殊具体的なものにどのようにあてはまるのかということを細かく調べなければ、一般化したものを真に理解することはない。人間は特に個性的な存在である。そこで社会の因襲によって互に判断するかぎりは、決して互に理解することはないであろう。因襲に頼ることが、洞察の欠如の主原因であり、それが孤独の悲劇をもたらす。

3 〝歴史的接近〟を欠き〝抽象的〟人間に気を奪われるどころか、ゴドウィンは人間の考えや行為を作る社会の役割を強調した。人間性をかくす一般化や因襲は他ならぬ社会や政治の産物である。

4 彼の〝自然な善〟の理論は単なる楽観論ではなくて、邪悪は洞察の欠如によるという確信の一表現である。

5 彼が誤解されてきた原因の一つは、彼は本来モラリストなのに政治的な改革者とみなされてきたことである。宣言や綱領としては、彼の無政府主義はたしかに姿方もないものだが、プラトーの共和国やルソーの社会契約説などではない。彼らと同じように、ゴドウィンは政治的な綱領ではなく社会の分析、特に〝偏見〟の原因すなわち洞察の欠如を扱った。この点から見ると、彼の無政府主義は不完全ではあっても非現実的ではない。

そしてゴドウィンの有名なフェヌロンの例から、功利主義として

の彼の倫理観をヒュームやハートリの影響とともに描き、ゴドウィンが迷い動揺した理性と感情の問題、行為や意見の上に及ぼす社会の影響についてのゴドウィンの見解について述べている。モンローは更に、モンテスキューが描いた社会的政治的形態に対するゴドウィンの批判に進み、ここから偏見の原因に対するゴドウィン批判を展開する。それを救う提案、及びモンロー自身のゴドウィン批判を展開する。

モンローは、通例のゴドウィン批判、たとえば「一つの致命的な欠陥がゴドウィンの体系の中心にある――人間の行為に及ぼす理性の力の誇張、人間の性質において理性と対立する本来的、動物的力についての誤った評価」(D. Fleisher) などを、ゴドウィンを真に理解するものではないとして斥ける。彼によれば、ゴドウィンは進歩を自動的だとは考えていなかった。偏見の原因は文明の複雑さと集中した権力の力なのである。彼を楽観主義というのは誤りで、ゴドウィンの小説は「人間は人間にとって最も怖しい敵」というような「政治的正義」の章句の例解に過ぎない。彼は人間の非人間的な性格について非常にリアルな、あるいは病的な感覚を持っていた。そこでゴドウィンが人間性を "natural goodness" というのは無意味であろう。

モンローは、ゴドウィンが今日正当に評価されないのはわれわれが棄ててしまった概念やカテゴリーを用いるからだとして、ゴドウィンの基本的な確信と考えるところを倫理、論理、心理について次のように要約する。

1　有徳であることは正しい感情を持つことである。正しい感情とは全ての事実を明白に見る時に感じるものである。このような感情を分析すると、これは最大幸福原理と公平の原理に全く一致していることがわかる。

2　真の知識は個別的である。一般化は全て、誤りではないとしても重大な誤りに導く。

3　人々が信じる一般化は、その時の政治制度による。

モンロウの書は全体としてはゴドウィン擁護であり、ゴドウィンの批判者も、少数の擁護者も最初に要約したような点を提起したことはなかったとして、新しい問題意識を誇っている。ゴドウィンが感情の役割を排斥したのではないということ、スピノザとの対比、社会制度の重視、楽観説批判などなどの指摘は必ずしもモンロウに始ったことではなく、いくつかの先例があるけれども、共感、洞察の欠如、偏見などから人間の孤独、一般化に対する批判などの問題を強く前面に押し出した点はモンローの功績であろう。実際ゴドウィンの書は、人間の主体的変革、窮極的な自由の主張、個人の独立の確立というような面で、今日につながる面を多く持っているし、モンロウは知識社会学との対比をも試みている(pp. 201～2)。実存主義やE・フロムの思想なども、ゴドウィンの思想の中に一脈通ずるものを意外に多く見出すかもしれない。

学界展望

経済変動と人口

渡邊國廣

一

十三世紀になって価格は騰貴した。しかし十四世紀には下落を始めた。黒死病期にはいり暴落はほとんど破局的であった。これは周知のところであろう。そういった経済上の変動は何によって起ったものか。従来この問題をめぐり論争の絶える間がなかった。一般にいわれるように、流通する貨幣量の増減ということで説明できるであろうか。そういった疑問から発して、十三・四世紀の経済変動を人口の変化から説明し、概観を企てようとしたのがほかならないポスタン教授の立場であった。* 教授は、十三世紀における価格の騰貴を人口増加による需要の増大で説明し、また十四世紀前半の下落を、前世紀来の人口増加に食糧供給がともなわなかったことから起る人口の減少で、従って需要の減退ということで説明しようとしたのであった。そしてまた世紀後半における価格の崩壊を、黒死病による人口の激減にともなう需要の減少で説明していた。

これで明瞭なように、そう説明するため、ここでは二つのことが自明の前提として考えられていた。一つは、ヨーロッパで収穫が一般に不足しつつあったこと、他は、人口上の変化がただちに需要に波及し、従って価格に変動の生ずること、以上の二つであった。ポスタン教授の説明はかかる前提に立っての主張であり、従ってそれが適切な議論かどうかは、二つの前提が出発点として承服できるものかどうかにかかって来よう。それらが事実に徴して承認し難いとすれば、経済史で人口という要因を経済変動説明の手段に導入しようとした一つの努力は徒労に帰すわけである。事実において無駄な企てであったろうか。二つの前提は確実な基礎に立っていたか。

ポスタン批判がなされるとすれば、こういった観点からでなければならない。そうした意味でアメリカ経済史学界からの一つの提言は注目されていい。** それによれば、これら二つの前提は曖昧な基礎に立っており、従ってポスタン説は理論構成の出発点において重大な誤謬を犯すものであった。いかなる根拠でそういわなければならないのか。その点がロビンソン氏の発言ではどう説明されているか。

しかしこの批判はただちにポスタン教授自身によって再批判された。*** 二つの前提は批判されるが如き薄弱な基礎に立つものではない。この再批判でポスタン教授はそう論じ、自説の正当なことを裏付けようとしたのであった。十三世紀を通じ人口増加率は意外に高く、ヨーロッパで収穫はそれに比例しなかった。これを克服すべく、